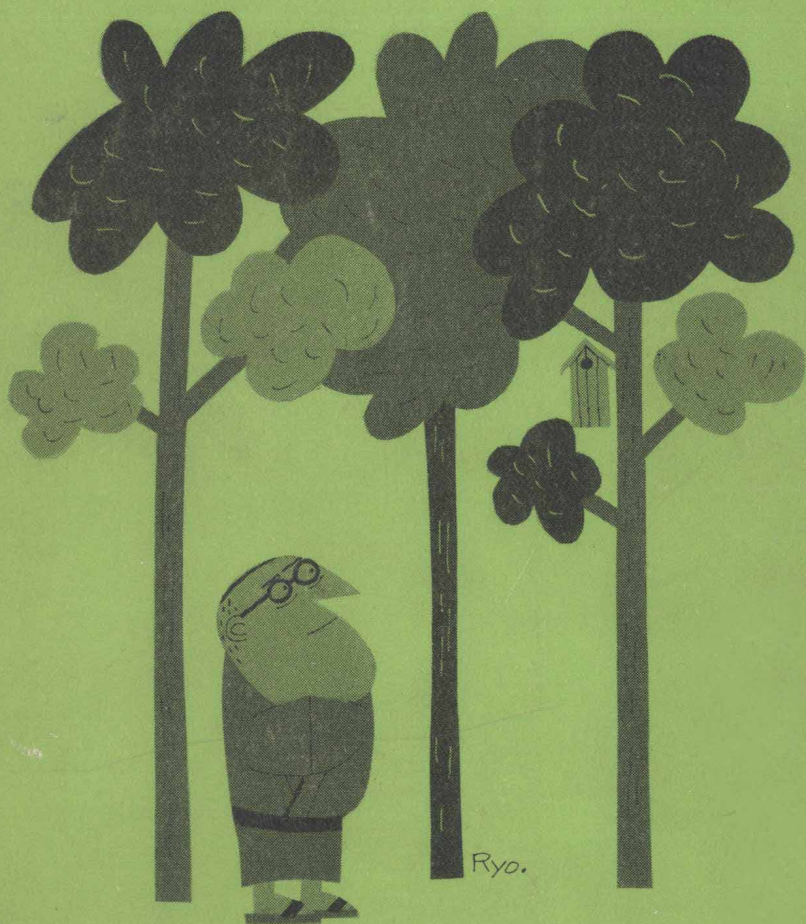


変奇館日常

男性自身シリーズ

山口 瞳



Ryo.

変奇館日常

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社

変奇館日常

男性自身シリーズ

昭和四十七年十月五日 印刷
昭和四十七年十月十日 発行

定価 四八〇円

著者 山口 瞳

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京 (三三) 三六、二二
振替 東京 八〇八番

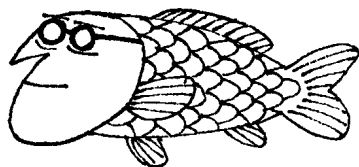
(乱丁・落丁のものは、本社またはお買
上げの書店にてお取替えいたします。)

印刷・株式会社金羊社 製本・大進堂製本

© Hitomi Yamaguchi. Printed in Japan. 1972

目

次



またまた、おかしな話

編集者の文章

京自慢 (一)

京自慢 (二)

胃の検査

木の恨み

蛙の面に

心残り

褒める

変奇館日常 (一)

変奇館日常 (二)

変奇館日常 (三)

変奇館日常 (四)

九 一四 一九 二四 二九 三四 三九 四四 四九 五四 五九 六四 六九 七四 七九 八四 八九 九四 九九

ハ ヤ 齒

教 訓 充

私の好きな (一) 八

私の好きな (二) 九

こういう情況 九

鱧子奇談 (一) 九

鱧子奇談 (二) 一〇

鱧子奇談 (三) 一〇

鱧子奇談 (四) 一四

鱧子奇談 (五) 二九

鱧子奇談 (六) 二四

鱧子奇談 (七) 二九

私の欲しいもの 二四



女のひと 一五

不思議の国の若者たち 一四

悪い癖 一四

秋の日 一五

麻布中学(一) 一五

麻布中学(二) 一六

麻布中学(三) 一六

麻布中学(四) 一七

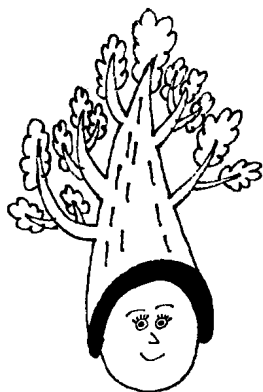
忘れもの 一七

珍説競馬必勝法 一八

変奇館その後 一八

十三年 一九

蜜と劔 一九



暮、正月(一) 二〇四

暮、正月(二) 二〇九

暮、正月(三) 二一四

暮、正月(四) 二一九

訓 辞(一) 二二四

訓 辞(二) 二三九

わからないこと 二三四

泣いている赤ん坊 二三九

梅を見に行く 二四四

吉野の梅 二四九

私の夢 二五四

夜来の雨 二五九

魯山人 二六四

カ装
ツト 嶺

柳
原
良
平

変奇館日常

男性自身シリーズ

褒める

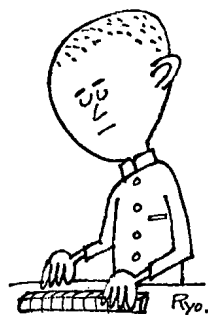
編集者と作者との関係は、褒める者と褒められる者との関係だと思っている。

私の知るかぎり、いい編集者は褒めてくれる。その褒めかたがうまい。ちょっとしたことを褒めてくれる。

私は叱られるとシユンとなってしまいうの質なので、連載がはじまると、はじめの三、四回までは黙っていてくれ、出来れば褒めてくれと頼む。先方も心得ていて、たいていはうまい具合に褒めてくれる。だから、何も言われなかったときは、これは駄目だったのだなと気づくようになる。そのかわり、連載が終ったときは忌憚きたんのない意見をきかせてくださいと頼む。これも、いままでのところはうまくいって、有難い意見を聞くことが出来た。

編集者は褒め役で、評論家は叱り役だから、評論家に叱られてもあまりこたえない。そのかわり、編集者に叱られると、ゲッソリとなってしまふ。いつの場合でも私は編集者は読者代表だと思っているので――。

編集者は褒め役だというが、もっと正確に言うと、激励する役の人である。これにはずいぶん助けられてきた。実際、ものを書く仕事というのは、猛烈なエネルギーを要するものであって、私な



ど、仕事でなければハガキ一枚書くのも厭だ。

ある編集者が言った。

「私も小説を書いてみたいと思うことがあるのですが、小説を書くこと自体はそれほど大変なこととは思いませんが、自分一人で世の中に立ちむかうのだと思うと厭になってしまふのです。その圧迫感を考えますと……」

この人は、よくわかつている人である。だから、うまく褒めたり激励してくれたりする。

やたらに褒めてくれというわけではないけれど、がいていえば、褒められると自信がついて、いい仕事が出来ようになるものだ。その点は子供とよく似ている。（褒め殺しというテもあるけれど、悪いものはわかつているので、そういうときに褒められると嬉しくない）

私自身も十九歳のときから編集者を続けていたので、そのことがよくわかる。他社の優秀な編集者は、作家を勇気づけるのがうまい人たちだった。

*

だいぶ以前のことになるけれど、私の勤めている会社に、駄目な社員がいた。

一口にいえば、彼は、トロイのである。言語が明晰でない。表現能力がない。会議で彼が発言すると、いらいらする。間違いも多い。そのうえ、欠席もすくなくなかった。

私は指導能力がないし、めんど臭いので、見放してしまった。彼に仕事をやらせるくらいなら私がやったほうが早いと思っていた。

そこへ、非常に評判のいい課長が転勤してきた。

どうやって駄目な社員を指導するかという点に興味があった。

課長は、徹底的に、駄目な社員を褒めた。それだけでなく、話相手になってやり、飲み相手になつてやつた。

駄目な社員は、たちまち元気になった。はつきりとモノを言うようになった。顔色もよくなり、活潑に社内を動き廻るようになった。私は、ちょっとした奇蹟を見るような思いがした。

駄目な社員が優秀な社員になったとはいえないが、まあまあ一人前の社員になった。賞与も増額されたはずである。また、彼に欠席が多かったという家庭の事情もわかってきた。課長は彼の家に遊びに行くという形で両親を説得し、そのほうも解決してしまった。

私は、会社のためというより、彼の人生のためにいいことをしてくれたと思って嬉しくなった。そのときに、はじめて褒めることの効用を知った。もちろん、課長は、そうなつたうえで今度は怒鳴りつけることもやつた。彼は、もう叱られてもショゲたりしないようになった。

*

私は子供の教育に関しては、絶対に叱らないという方針でのぞんだ。

そういうと体裁がいいが、実は子供を叱るという自信がなかったのである。

そのかわり、少しでもいいことをしたら褒めることにした。

これが効果があつたかどうかは、わからない。一長一短だろう。

倅に言わせると、パパは叱つてくれないからツマライという。父親らしくないのだろう。子供にとっては、叱られるということも、場合によっては一種の嬉しいことであるようだ。

私は、道端や、客の前で幼児を叱りつける母親というのが大嫌いだ。見苦しい行為だと思つていい。私にとっては、ミットモナイことは悪いことだという觀念が、かなり強烈に存在するのである。

これはミットモナイほうの話であるが、私は子供のときに麻雀が強かった。

中学の三、四年のときには大人と賭麻雀をやっていた。戦前で千点二円という麻雀は、子供では負けると大変だが、ほとんど負けたことがなかった。

麻雀というゲームに勝つには、いやらしく打たないといけない。それがわかっているので厭だった。相手をヒツカケルという要素の強いゲームである。陰險な勝負事だと思っていた。「忍の一字」などという。

私は、セミプロといってもいいような人たちと麻雀を打った。かなりのインテリで、麻雀で生活費の一部を得ている人たちである。戦前には、こういう人たちの数も少なくなかった。

あるとき、その人たちの一人が、私の家で徹夜をした後で、私にこう言った。

「きみは何をやっても成功するよ」

そのとき私は勝ったのか負けたのか覚えていないが、セミプロ氏は、私の麻雀の技倆を評価したのである。

そのように、私の麻雀は、陰險で粘り強く合理的でもあったのだろう。私が子供のときに、周囲の大人たちにつけられた渾名は「冷血動物」であり「ゲジゲジ」であつたが、それは麻雀のせいではなかったかと思う。私は厭がられていた。

だから、セミプロ氏に褒められたときに、半分は嬉しく、半分は嬉しくなかった。セミプロ氏は、麻雀のように粘っこくやれば何事にも成功するはずだと思ったのだろう。私は、子供であっても、勝負事と実人生とは違うと思っていたから、彼の言うことを素直に受けとったわけではない。

しかし、正直に白状するならば、彼の言ったことは、そのまま私の心のなかに長く残っていた。私は、いまでもその場の情景を思いだすことができる。

私は内向的な少年だった。世の中のことを悲観的に見る傾向があった。体も丈夫ではないし、学業成績も劣悪だった。

まことにミットモナイ話であるが、私は、何度も、インテリやくざみたいな男の言葉を思いだすことがあった。それが私の支えになっていたといえないこともない。褒められることが極めてすくなかったので印象に残っていたのかもしれない。

なんとも恥ずかしい話である。

たとえば子供の図画などは、良い点をつつけて褒めてやると、がぜん上達するものだそうである。それ以外に方法はない。

この齡としになってこんなことを言うのはおかしいが、褒められたことは忘れないものだし、褒めることの効用は案外に大きいと思わないわけにはいかない。

変奇館日常(一)

変奇館主人であるところの偏軒(すなわち私)の日常について書いてみよう。

四、五年前から私はなんだが頭がボーッとしていて脳が煮えているように思われたので、ノニエ山口と称したことがある。その状態は少しも変わっていかなくて、特に締切が迫ってきたり、仕事にかかったりすると惚けてしまつて、依然としてノニエとなつてしまう。

しかしながら、ノニエに馴れてしまふということもあるので、つまらなくなつて、次には、バンス山口を自称していた。

私は出版社から大枚の金子を拝借した。そのことが気がかりになつて、その出版社の人に会うたびに、済まない申し訳ないと言っていると、彼は、いや、そうではない山口さん、あれは借金ではなくて前渡金と考へてくださいとおっしゃる。つまり書物の印税の前渡しであると言われるのである。

するとそれはキャバレーのホステスなんかのバンスと同じことになる。バンスとはアドバンスメント(前貸し)の略であるが、バンス山口というのは、何かびつたりと合うような気がした。

私の父の若いときの渾名は常無銭であつた。また、青顔先生とも呼ばれた。いつも蒼い顔で勉強

